

大学生の学業に対するリアリティショックと

学業・授業意欲低下の関連

—Locus of control の高低に応じた関連の違いの検討—

半澤礼之

1. 問題と目的

中央教育審議会答申(1999)の「初等中等教育と高等教育の接続の改善について」を契機として、現在、高等教育を対象とした領域では「高校と大学の接続」というテーマのもと、研究が蓄積されている。その多くは、例えばリメディアル教育のような学業に関する問題に焦点があてられており(荒井, 1998, 2000)、高校から大学への移行期において、学業が重要な意味をもつことがこのような動向から推察される。

高校から大学への移行期における学業の重要性は、これまでの心理学研究においても様々に指摘されてきた(例えば、大坊・末廣, 1986; 神藤・石村, 1999)。そのような研究の多くは、高校と大学における差異を大学生の大学適応の問題と関連づけて論じるものであったといえる(半澤, 2007)。ここで半澤(2007)はそのような諸研究を概観しながら、これまでの研究の問題点として、上述の差異と大学適応の関連は研究者自身が教員として学生と接した際に感じた印象レベルの指摘にとどまることが多く、この点に対する大学生の意識を実証的に検討した研究は多くないことを指摘している。そしてその大学生の意識を学業に対するリアリティショックと定義し、尺度を作成した。学業に対するリアリティショックとは半澤(2007)によれば、入学前に抱いていた大学における学業イメージや期待と、大学入学後に経験している学業との間の、現在におけるズレによって生じた否定的な違和感として定義されるものである。この学業に対するリアリティショックは多くの学生が経験することが推察されるが、その感じ方には差が見られることが想定される。例えば Hanzawa(2007)は、何を目的として大学に進学するのか、あるいは進学してきたのかということを表す大学進学動機(古市, 1993)によって学業に対するリアリティショックを感じる程度が異なることを明らかにしている。しかし、大学教育を考えた際に入学後の学生に対する支援や教育は特に重要な問題であるが、高校の時点の進路指導は勿論のこと、大学側としては入学前の状況に関わることはできない(小島・渡部, 1997)。従って、大学進学動機以外の要因についても検討をおこなう必要があると考えられる。

それでは、学業に対するリアリティショックを感じる程度に影響を与える要因として、どのようなものを仮定すればよいのだろうか。この点を検討する上で、現代の大学生の特徴

に着目することは重要だと考えられる。なぜなら、学業に対するリアリティショックは大学生の学業適応と関連を持つことが明らかになっており(半澤, 2007), 大学生支援のためには彼らの特徴に着目した検討が必要だと考えられるからである。大学生の特徴について学業に関する従来の研究では、学業離れや意欲低下といったことが多く議論されてきた。しかし近年, 大学生の学業重視傾向が様々に指摘され, 具体的なデータとして示されている(溝上, 2004; 武内・佐野・伊藤・谷田川, 2004; 武内・谷田川・伊藤, 2005)。このように, 大学生の学業重視傾向が指摘される一方で溝上(2004)は, 一見積極的であるように見える学生たちの学習態度の裏に, 受身的な学習態度が潜んでいる場合をとりあげ, それを問題だとしている。また, 東京大学の大学経営・政策研究センター(2008)が48233名の大学生を対象として行った大学での生活・学習に関する調査においても, 「授業の中で必要なことは全て扱って欲しい」という回答が全体の7割であったことが明らかになっている。これらの指摘から, 大学生の学業重視傾向が明らかにされる一方で, その学びが受動的なものである学生の存在という可能性が示唆されるといえよう。そしてそのような学生は, 大学での学びを教育サービスとして捉え, 学びを大学が準備すべきものだという態度をもってることが想定される。従って, そのような学生は学業に対するリアリティショックを経験した際に, その原因は自分の外側=大学にあると考えるのではないだろうか。ここから, そのような大学生は学業に対するリアリティショックを感じた原因について, それを自らに帰することをせず, 結果として, 自分自身の行動によってその原因を取り除くことが出来ないという判断を行うと考えられる。一方, これまでに述べてきたような受動的な態度を持つ学生とは異なり, 学業に対するリアリティショックを経験した原因を自分の内部に見出すような学生も存在すると考えられる。そのような学生は, 原因を自分の内部に見出しているため, それを自らの行動で変えられるという感覚を持つのではないだろうか。従って, 先述のような受動的な大学生と比較して, 学業に対するリアリティショックを感じる程度が弱いと思われる。つまり, 学業に対するリアリティショックを感じる程度について, その原因を外的か内的のいずれに帰属するのかという点から検討できるといえるだろう。

以上の議論から, 学業に対するリアリティショックの経験の程度は **Locus of control (Rotter, 1966)**(以下, **LOC**)によって異なることが考えられる。**LOC**とは自分自身の行動とその結果の生起が随伴しており, 結果の生起の統制が自分自身で可能であるかどうかについての信念や期待である。そして, 物事の原因を自分の外側に帰属する傾向の強さは **External** 傾向として表され, 物事の原因を自分の内側に帰属する傾向の強さは **Internal** 傾向として表される。先述したように, 学業に対するリアリティショックの原因をどこに見出すのかによって, それが対処可能であるかどうかの認識が異なることが推察される。ここから, **External** 傾向の強い大学生は, 学業に対するリアリティショックを経験した場合にその原因を自分の外部(=大学)に求めるという傾向を示し, その結果として学業に対するリアリティショックへの対処に困難を感じるだろう。その一方, **Internal** 傾向の強い大学生は学業に対するリアリテ

イショックを経験した原因を自分の内部に求め、その結果としてそれを対処可能なものとして捉えると推察される。従って、External 傾向の強い大学生のほうが Internal 傾向の強い大学生よりも、学業に対するリアリティショックをより強く感じる事が考えられる。

また、大学生の適応やその支援を考えた際に、学業に対するリアリティショックの経験が、彼らの学業意欲とどのような関係にあるのかを検討することが重要だと思われる。半澤(2007)では、妥当性の検討において学業に対するリアリティショックと学業意欲低下・授業意欲低下(下山, 1993)の関連が示されているが、大学生の特徴に応じた検討はおこなわれていない。しかし、大学進学率の増加に伴いユニバーサル化した大学(Trow, 1976)においては、大学生の特徴に応じた検討も重要であろう。

以上より本研究では、LOCの高低による学業に対するリアリティショックの差異と、学業に対するリアリティショックと学業意欲低下・授業意欲低下の関連を検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象者

東京都内の四年制私立大学文系学部に所属する大学生1,2年生362名(男性152名, 女性200名, 1年生158名, 2年生204名)であった。調査対象は2校(A大学157名, B大学205名)であり、調査対象者の平均年齢は19.78歳($SD=1.78$)であった。

調査用紙の構成

性別, 学年, 学校名を尋ねるフェイスシートに加えて, 以下の3つの尺度をもちいた調査用紙を作成した。

(1)一般的Locus of control尺度: 鎌原・樋口・清水(1982)によって作成された, 18項目からなる尺度である。合計得点が高いほどInternal傾向が強いことを表す。

(2)学業に対するリアリティショック尺度: 半澤(2007)によって作成された, 27項目からなる尺度である。「教員不満」「講義内容不満」「履修不自由感」「時間束縛感」「講義水準不満」の5因子からなる。質問の際には, 「あなたの大学での学業に対する感じ方についてお尋ねします。あなたは、大学に入っているいろいろな経験をする中で、「実際に取り組んでみると、入学前に思っていた大学での学業(勉強)とは何か違う感じがするなあ」という違和感を大学での学業に対して感じたことはありますか。以下の質問について、あなたが感じた違和感に当てはまる程度の数字に丸をつけてください」という教示を行った。

(3)学業意欲低下・授業意欲低下: 下山(1995)によって作成された意欲低下尺度の中から, 学業意欲低下と授業意欲低下を測定する下位尺度を用いた。各5項目で合計10項目である。本尺度は, 意欲低下を測定するものである。従って, 得点が高いほうがより意欲が低下していることを表す。

本研究では, これらの尺度について(1)は4件法で, (2)(3)は5件法で質問をおこなった。

3. 結果

尺度の構成の確認

本研究で用いる尺度は全て既存の尺度であるため、下位尺度ごとに信頼性係数を算出してそれが十分な値であれば、元尺度の構成をそのまま用いることとした。その結果、一般的Locus of control尺度は $\alpha=.73$ 、学業に対するリアリティショック尺度では $\alpha=.71\sim.82$ 、学業意欲低下では $\alpha=.70$ 、授業意欲低下では $\alpha=.72$ という値が得られたため、本研究では元尺度の構成を用いて今後の分析を行うこととした。

調査対象者の分類

一般的LOC尺度得点において、性差は認められなかった($t[351]=1.22$ n.s.)。これは鎌原ら(1982)と一致する結果であった。また、学校差($t[351]=0.50$ n.s.)や学年差($t[351]=0.12$ n.s.)についても認められなかった。そこで本研究では性別や学校、学年を区別せず、全ての調査対象者を一般的LOC尺度の得点に応じてLOC得点の高いInternal群と、LOC得点の低いExternal群に分類することとした。分類に際しては度数分布にもとづき得点の上位約35パーセントと下位約35パーセントを抽出し、それぞれをInternal群($N=131$)、External群($N=140$)とすることとした。Internal群はLOC得点が55点以上の調査対象者であり、External群はLOC得点が50点以下の調査対象者であった。また、調査対象者全体の一般的LOC得点の平均値は52.64($SD=7.21$)であった。

次にInternal群とExternal群の一般的LOC得点の差を検討するために、群を独立変数、一般的LOC得点を従属変数とした t 検定をおこなったところ、Internal群のほうがExternal群よりも有意に一般的LOC得点が高いという結果が得られた($t[269]=22.53$ $p<.001$)。Table1に群ごとの一般的LOC得点と、学業に対するリアリティショックの下位尺度得点、学業意欲低下得点、授業意欲低下得点を示す。

Table1. 2群におけるLocus of control, 学業に対するリアリティショック, 意欲低下の平均値

	Internal群(N=131)	External群(N=140)
Locus of control	59.24 (3.66)	46.00 (5.72)
教員不満	3.34 (0.66)	3.54 (0.67)
講義内容不満	2.76 (0.70)	3.39 (0.85)
時間束縛感	3.23 (0.79)	2.81 (0.76)
履修不自感	3.54 (0.74)	3.78 (0.73)
講義水準不満	2.53 (0.61)	2.73 (0.58)
学業意欲低下	2.82 (0.82)	3.13 (0.81)
授業意欲低下	2.86 (0.90)	3.15 (0.91)

Internal群とExternal群における学業に対するリアリティショックの差異

一般的LOC得点の高低に応じた、学業に対するリアリティショック尺度の各下位尺度得点の差異を検討するために、群を独立変数、学業に対するリアリティショック尺度の各下

位尺度得点を従属変数として平均値の差の検定をおこなったところ、Table2の結果が得られた。「時間束縛感」を除く全ての下位尺度においてInternal群と比較してExternal群の得点が高いという結果であった。その一方、「時間束縛感」については、Internal群のほうがExternal群よりも得点が高いという結果であった。これらの結果から、全体の傾向としてはExternal傾向が強い大学生は、Internal傾向が強い大学生と比べて学業に対するリアリティショックを強く経験していることが示された。

Table2.Locus of controlの高低における学業に対するリアリティショックの平均値の差の検定結果

	Internal群	External群	t値
教員不満	3.39(0.67)	3.62(0.66)	2.77 **
講義内容不満	2.80(0.73)	3.32(0.83)	5.38 ***
時間束縛感	3.26(0.79)	2.82(0.82)	3.87 ***
履修不自由感	3.58(0.74)	3.64(0.73)	0.77
講義水準不満	2.58(0.62)	2.70(0.56)	1.66 †
括弧内は標準偏差	†p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001		

Internal 群と External 群における学業に対するリアリティショックと学業・授業意欲低下の関連

次に、群による学業に対するリアリティショックと学業意欲低下、授業意欲低下の関連について検討をおこなった。ここでは、学業に対するリアリティショックを説明変数、学業意欲低下、授業意欲低下のそれぞれを目的変数とする強制投入法による重回帰分析をおこなうが、学業に対するリアリティショックを構成する5因子において因子間の相関が高かった($r=-.24\sim .60$ $p<.001$)ため、多重共線性による問題が生じる可能性が想定された。そこで、学業に対するリアリティショック尺度の5因子に対して二次因子分析を行い、因子ごとの得点を合成することとした。学業に対するリアリティショック尺度の各因子の下位尺度得点に対して因子分析(最尤法、プロマックス回転)をおこなった。因子負荷量の絶対値が.40の項目を基準としたところ、除外される項目はなかった。二次因子分析によって得られた結果をTable3に示す。第1因子は、講義内容不満、教員不満、講義水準不満から構成されており、学業そのものへの不満に関するものであると考えられたため、「学業内容不満」とした。第二因子は、「履修不自由感」「時間束縛感」から構成されており、大学での学業における形式的な側面への不満であると考えられたため、「学業形式不満」とした。「学業内容不満」と「学業形式不満」の間の相関係数は $r=-.02$ であり、両者の相関は有意ではなかった。

Table3.学業に対するリアリティショック尺度への二次因子分析結果

	学業内容不満	学業形式不満
講義内容不満	.92	-.13
教員不満	.65	-.11
講義水準不満	.60	.11
時間束縛感	-.18	.73
履修不自由感	.31	.47
因子間相関		-.02

因を自らに帰すことで、解決可能なものとして捉えるのではないだろうか。事実、Internal 傾向が高い者は問題場面に直面した場合それを解決するために積極的な行動をとり、External 傾向が高い者はなにもしなかったり、あきらめるといった頭の切り替えを行ったりという消極的行動をとることが多い(鎌原ら,1982)。従って、Internal 群と比較して External 群のほうが学業に対するリアリティショックを相対的に強く感じるという本研究の結果が得られたと考えられるだろう。

ここで、External 群のような大学生を理解する上で、大学生の生徒化(伊藤, 1999)という概念が有効であるように思われる。大学生の生徒化とは伊藤(1999)によれば、「そもそも学生であり、生徒ではないとされている大学生について、彼らが生徒と化す現象」である。この概念は、あまり一般的ではないものの、何人かの論者が多かれ少なかれイリッチの「学校化」概念に触発されてそれぞれの文脈で用いてきた(伊藤,1999)。そして、生徒化した学生の学業的側面の特徴として伊藤(1999)は、学ぶべきものは全て大学が与えてくれるという受動的な態度を指摘している。これは、先の溝上(2004)の指摘や大学経営・政策研究センター(2008)の結果と合致するものであろう。External 群は外的統制の傾向が高い群であった。そしてそれは、生徒化した大学生が示すような学業に対する受動的な態度につながるものであるといえるだろう。ここから、本研究で検討をおこなった外的統制の高さは、生徒化した大学生の一側面であると考えられる。

また、External 群と比較して Internal 群の得点が高かった時間束縛感については、次のような解釈ができる。「時間束縛感」は単位の取得や講義の数といった、大学の制度上変更が困難なものを問う質問項目から構成されている。Internal 傾向が強い学生は自分の行動とその結果の間の結びつきに対する認識が強いことが想定される。従って、時間束縛感のような自らの力で変更を行うのが困難なものに対する違和感を相対的に強く感じるのは妥当な結果であると考えられる。

Internal 群と External 群における学業に対するリアリティショックと学業意欲低下・授業意欲低下の関連

本研究の結果から、Internal 群、External 群ともに学業内容不満が学業意欲低下、授業意欲低下と関連を持つことが明らかになった。従って、群によって学業に対するリアリティショックを感じる程度は異なるものの、学業内容不満という学業に対するリアリティショックを強く感じた場合には、Locus of control の高低に関わらず学業意欲や授業意欲が低下することが示されたといえよう。しかし、学業内容不満から学業意欲低下、授業意欲低下への影響の強さについては、Internal 群のほうが External 群よりも強いという結果であった。そこでまず、両群における学業内容不満と学業意欲低下、授業意欲低下の関連について考察をおこない、次に群による影響の強さの違いについて考察を行う。

はじめに、Internal 群、External 群ともに学業内容不満と学業意欲低下、授業意欲低下の間に関連がみられたという結果から、学業内容不満という学業に対するリアリティショッ

クは大学生の学業適応に対して重要な影響を及ぼすものだとすることができるだろう。学業内容不満は、講義内容不満、教員不満、講義水準不満から構成されるものであり、大学での学業と直接関連をもつものであると考えられる。現代の大学生の傾向として、資格・技術につながる学部・学科・コース選び(山内, 2004)が指摘されている。また、武内(2003)によると、近年大学名よりも学部・学科名で進学を決定する者が増加していることも指摘されている。これらは換言すれば、学びの内容を重視して大学を選択しているということがいえるだろう。従って、学びの内容に対して否定的な違和感を強く感じた際に、学業や授業に対する意欲が低下するのは妥当な結果だと考えられる。一方、学業形式不満は時間束縛感や履修不自由感といった、先述したような大学での学業の内容とは直接関わらない二次的な要因によって構成されているものである。また、履修に対する不満は、その後の学年のシラバスを参照したり先輩から話を聞いたりといった将来の学業生活を展望することで解消されることがある(半澤, 2004)。従って、学業形式不満は学業意欲低下や授業意欲低下とは直接関連を持たなかったのかもしれない。また、Table2 に示されているように、Internal 群は External 低群よりも学業に対するリアリティショックを感じる程度が低かった。この点においては、Internal 群は学業適応には問題が無い群として理解できる。しかし、Internal 群においても学業内容不満から学業意欲低下や授業意欲低下への影響が見られたという本研究の結果から、Internal 群であっても学業不適応に陥る可能性があることが指摘できるのではないだろうか。

次に、Internal 群のほうが External 群よりも学業内容不満と学業意欲低下、授業意欲低下の関連が強かったという結果について検討をおこなう。先述のように、Internal 群は学業に対するリアリティショックを経験した際に、その原因を自らに帰する傾向が強いことが想定される。その結果として、External 群よりも「時間束縛感」を除く学業に対するリアリティショックの下位尺度の得点が低かった。このような特徴を持つ Internal 群の学業に対するリアリティショックの高さは、その原因を自らに帰することが出来ないと感じたときに生じると考えられる。Internal 傾向の高い大学生が、学業に対するリアリティショックの原因を外的なもの=大学に帰さざるを得ない状況になった場合、そこには大きな不適応感が生じると考えられる。一方、External 傾向の高い大学生はそもそも学業に対するリアリティショックの原因を自らの外側=大学においており、先述したように問題状況においてあきらめや頭の切り替えといった対処方略を用いるため、学業に対するリアリティショックを経験しても、大きな意欲低下にはつながらないのかもしれない。本研究の結果から、学業に対するリアリティショックを強く経験した場合、Internal 傾向が高いからこそ External 傾向の高い大学生と比較してより強く学業意欲低下や授業意欲低下が生じる可能性が示唆されたのではないだろうか。

今後の展望

最後に、今後の展望として以下の2点をあげる。

1 点目として、大学生の学業場面に固有な LOC の検討の必要性があげられる。本研究では LOC を学業に対するリアリティショックと関連を持つ要因として取り上げた。しかし、本研究で用いた一般的 LOC 尺度は、場面を限定しない包括的なものだといえよう。従来の LOC を取り扱った研究の多くにおいて、場面を限定した上での検討の重要性が指摘されている(Wallston, Wallston, & Devellis,1978 ; 鎌原, 1987)。従って、大学生を対象として学業場面に焦点化した LOC について検討をおこなう必要があるのではないだろうか。

2 点目として、本研究の知見をふまえた上での大学生支援の検討の必要性があげられる。本研究は、学業に対するリアリティショックが LOC のもち方によって異なること、そしてそのもち方に関わらず、学業内容不満という学業に対するリアリティショックが学業意欲低下・授業意欲低下と関連を持つということを指摘するにとどまっている。従って、この知見を実践場面へとどのように反映させていくのかについて、今後の検討が必要になると考えられる。

5. 引用文献

- 荒井克弘 (1998) 高校と大学の接続—ユニバーサル化の課題— 高等教育研究, **1**, 179-197.
- 荒井克弘 (2000) 高校と大学の接続 教育制度学研究, **7**, 181-185.
- 中央教育審議会答申 (1999) 初等中等教育と高等教育との接続の改善について 文部科学省
- 大坊郁夫・末廣晃二 (1986) 大学生における留年現象と不適応 山形大学紀要(教育科学), **9**,1,45-74.
- 大学経営・政策研究センター (2008) 全国大学生調査：基礎集計表 http://daikei.p.u-tokyo.ac.jp/index.php?plugin=attach&refer=College%20Student%20Survey&openfile=CSSStotal_gt1_updated.pdf (2008年2月29日)
- 古市裕一 (1993) 大学生の進学動機と価値意識 進路指導研究, **14**, 1-7
- 半澤礼之 (2004) 学生の学業環境に対する適応(2) —新入生は学業に対する不満・問題にどのように対処しているのか— 日本教育心理学会第46回総会発表論文集,483.
- 半澤礼之 (2007) 大学生における「学業に対するリアリティショック尺度」の作成 キャリア教育研究 **25**,1,15-24
- Hanzawa, R (2007) The student's motives for entering university and their adjustment to university in Japan: Relation between reality shock for studying and passivity in the area of study and class *13th European Conference on Developmental Psychology(postersession),programme,90*
- 伊藤茂樹 (1999) 大学生は「生徒」なのか—大衆教育社会における高等教育の対象— 駒澤大学教育学研究論集, **15**, 85-109
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982) Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, **30**,4,38-43

- 鎌原雅彦 (1987) 高校生の Locus of Control に関する研究 : 期待及び学習動機との関連
東京大学教育学部紀要, **26**,107-117.
- 小嶋明子・渡辺三枝子 (1997) 青年期の進路決定過程—大学生生活への適応を規定する要因
に関する因果モデルの検討— 心理学紀要, **7**, 39-44
- 溝上慎一 (2004) 大学新入生の学業生活への参入過程—学業意欲と授業意欲—. 京都大学
高等教育研究, **10**, 67-87
- Rotter, J. B. (1966) Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement.
Psychological Monographs, **80**(Whole No.609), 1-28.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, **43**, 145-155.
- 神藤貴昭・石村雅雄 (1999) 高等学校と大学の接続に関する研究 (その 1) —学生の高等
学校と大学における学業についての差異の認識の観点から— 京都大学高等教育研
究,**5**,23-39.
- 武内清・佐野秀行・伊藤素江・谷田川ルミ (2004) 現代大学生の変化と大学満足度に関す
る実証的研究—「12 大学・学生調査」の再分析— 上智大学教育学論集, **39**, 27-43.
- 武内清・谷田川ルミ・伊藤素江 (2005) 「新興大学」の学生の生活と意識—「伝統総合大
学」「中堅大学」との比較を中心に— 上智大学教育学論集, **40**, 61-78.
- 山内乾史 2004 現代大学教育論—学生・授業・実施組織— 東信堂.
- Wallston, K. A., Wallston, B. S., & Devellis, R. (1978) Development of the multidimensional health
locus of control (MHLC) scale *Health Education Monograph*, **6**,161-170.

Abstract

The relation between reality shock for studies and passivity in the area of study and class in undergraduates

Difference of relation by Locus of control

Reino Hanzawa

The propose of this study was examined the relation between reality shock for studies (Hanzawa, 2007) and passivity in the area of study and class (Shimoyama, 1995) from the viewpoint of locus of control (Rotter, 1966). Three hundred sixty tow undergraduates completed a sheet of questionnaire consisted of scale of Locus of control and Reality shock for studies, Passivity in the area of study and class. They were divided into two groups depending on result of Locus of control scale (Internal group that was high score and External group that was low score). As a result, there were differences in the score of reality shock for studies by the group. Internal group's score was lower than external group. Moreover, internal group's relation between score of reality shock for studies and passivity in the area of study and class was stronger than that of External group. Therefore, it was suggested that there are difference in internal group's experiments of reality shock for studies and external group's experiments of reality shock for studies.